

Title	タイ語の格助詞「khǎoŋ」の用法
Author(s)	宮本, マラシー
Citation	大阪外国語大学論集. 7 p.27-p.36
Issue Date	1992-09-16
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79564
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

タイ語の格助詞「khǎwŋ」の用法

宮 本 マラシー

A USAGE OF THE POSSESSIVE ADJECTIVE “khǎwŋ” IN THAI

Marasri MIYAMOTO

この研究は、タイ語の格助詞「ของ」(khǎwŋ)の用法について、
 名詞Aと名詞Bを結びつけるために、「AのB」という形で表現されるように、
 助詞「ของ」を使用するのが普通である。「AのB」という形はタイ語においては「B khǎwŋ A」
 (khǎwŋ=of)という形で常に対応できると考えられがちであるが、必ずしもすべてに「B
 khǎwŋ A」が当てはまるわけではない。たとえば、

<はじめに>

日本語には、名詞Aと名詞Bを結びつけるために、「AのB」という形で表現されるように、
 助詞「の」を使用するのが普通である。「AのB」という形はタイ語においては「B khǎwŋ
 A」(khǎwŋ=of)という形で常に対応できると考えられがちであるが、必ずしもすべてに「B
 khǎwŋ A」が当てはまるわけではない。たとえば、

<私の本>は หนังสือ ของ ฉัน
 本 の 私

という「B khǎwŋ A」の形もあれば、

<タイ語の勉強> การเรียน ภาษาไทย
 勉強 タイ語

という「BA」の形や

<家の中> ใน บ้าน
 中 家

という「PREP.^ωA」、そして

<子供用の服> เสื้อ สำหรับ เด็ก
 服 用 子供

という「B PREP.A」などの、様々な形がある。これについて、Piyamaawadee⁽²⁾(1988)は、彼女の日本語からタイ語への機械翻訳についてのレポートで、それらの形を25形に分けている。筆者が知っている日本人のタイ語学習者の間には、PREP.の使い方に誤解があっても（たとえば、thīiをtōnに、càakをdūaiに間違えて使う、など）、「PREP.A」「B PREP.A」、というような形であるものを、誤って、「BA」または「B khǎwng A」と使う者はほとんどいない。使い方によく混乱を来しているものの多くは「BA」と「B khǎwng A」の形を使った、AとBとの意味的關係が対象関係と所有関係のものである。たとえば、「การเรียนรู้ของภาษาไทย」（タイ語の勉強）、「หนวดของแมว」（猫の髭）、「การอธิบายครู」（先生の説明）、など。つまり、「B khǎwng A」を使うのが普通であるところを「BA」に、普通「BA」が使われる名詞句を「B khǎwng A」に、誤って使うということである。これについて、今まで、学習者は「B khǎwng A」としてもよいし、「BA」としてもよいと曖昧に言われてきた。タイ人のタイ語学研究者の間にもこの問題を特に取り上げた者はいないようである。パントゥメーター（1984）でも、名詞と所有者を表す語とを結ぶ際に khǎwng はあってもいいし、なくてもいいというような程度にしか触れていない。そこで、日本人の学習者が容易に理解できるように、どの場合に「B khǎwng A」という形をとるのか、どの場合には「BA」という形になるのか、要するに名詞Aと名詞Bを結ぶのに khǎwng が使われるかどうか、また、どういう時に使われ、そして使われないのかを、この小論において明らかにしたい。

この研究の資料にしたものは、1986年から大阪外国語大学・タイ語学科の学生達を書いた作文、タイ語の新聞、本、雑誌などから集めたものであり、また、タイ人の日・タイ言語比較研究者、タイ語学研究者、留学生のインフォーマントの方々の意見も参考にした。

「AのB」の意味関係

島津、内藤、野村（1986）は計算機による「AのB」の意味関係を解析を目的として、(a) AあるいはBの主素性、機能素性と、(b) AあるいはBの依存素性という2項目によって「AのB」の意味関係を決定し、そして、(a)の情報により「AのB」の意味関係を5つの大分類に、更に、大分類を(b)の情報により86の小分類に分けた。

意味関係の大分類は次のとおりである。

ケース1 Bが述語相当語で事象を表し、AがBの格要素である場合

例：太郎の結婚、電車の通学

ケース2 Bが、後続の話に対し、Aを基点にした格的な役割を示す場合

例：ビルの前、彼のため

ケース3 BがAの属性である場合

例：バラの色、橋の長さ

ケース4 Aが述語の相当語で、Bがその述語の格要素となっている場合

例：散歩の人、通学の手段

ケース5 AがBの一種の属性値であると見る場合

例：弁護士の中村さん、先生の絵

筆者は、この分類を参考にし、日本人のタイ語学習者の間に、最も混乱し易いと思われる、ケース1の対象関係とケース3の所有関係のみ、この小論に取り上げて、タイ人の「B khǎwɔŋ A」と「BA」という形での名詞句の使い分けを考えたい。

I：名詞A（以下Aと略記する）と名詞B（以下Bと略記する）との意味関係が対象関係である場合

例：

- | | | |
|------------|-------------|-----------|
| 1. 田中さんの愛 | 2. 機械の能力 | 3. 社会の変化 |
| 4. 脳の働き | 5. セールスの言い方 | 6. T先生の講義 |
| 7. M会社の工事 | 8. 英語の講義 | 9. 電話の設置 |
| 10. 金持ちの悩み | 11. タバコの害 | |

上述の日本語の名詞句「AのB」に対応するタイ語を「B khǎwɔŋ A」と「BA」と2つの形にし、BとAをむすびつけるのには khǎwɔŋ を使う必要があるかどうかを考えていきたい。

- | | | |
|---------------|--------------------------------------|--------------|
| 1. <田中さんの愛> | [正] ^③ ความรักของคุณทานากะ | 「B khǎwɔŋ A」 |
| | [誤] ^④ ความรักคุณทานากะ | 「BA」 |
| 2. <機械の能力> | [正] ความสามารถของเครื่องจักร | 「B khǎwɔŋ A」 |
| | [誤] ความสามารถเครื่องจักร | 「BA」 |
| 3. <社会の変化> | [正] การเปลี่ยนแปลงของสังคม | 「B khǎwɔŋ A」 |
| | [誤] การเปลี่ยนแปลงสังคม | 「BA」 |
| 4. <脳の働き> | [正] การทำงานของสมอง | 「B khǎwɔŋ A」 |
| | [誤] การทำงานสมอง | 「BA」 |
| 5. <セールスの言い方> | [正] วิธีพูดของเซลแมน | 「B khǎwɔŋ A」 |
| | [誤] วิธีพูดเซลแมน | 「BA」 |

6. <T先生の講義>	〔正〕 การสอนของอาจารย์T	「B khǎwng A」
	〔誤〕 การสอนอาจารย์T	「BA」
7. <M会社の工事>	〔正〕 การก่อสร้างของบริษัทM	「B khǎwng A」
	〔誤〕 การก่อสร้างบริษัทM	「BA」
8. <英語の講義>	〔誤〕 การสอนของภาษาอังกฤษ	「B khǎwng A」
	〔正〕 การสอนภาษาอังกฤษ	「BA」
9. <電話の設置>	〔誤〕 การติดตั้งของโทรศัพท์	「B khǎwng A」
	〔正〕 การติดตั้งโทรศัพท์	「BA」
10. <金持ちの悩み>	〔正〕 ทุกข์ของคนรวย	「B khǎwng A」
	〔誤〕 ทุกข์คนรวย	「BA」
11. <タバコの害>	〔正〕 โทษของบุหรี่	「B khǎwng A」
	〔誤〕 โทษบุหรี่	「BA」

これらの例におけるタイ語の名詞句の形を区別すると、次の二つのグループに分けることが出来る。

グループ(a)：「B khǎwng A」という形を使うのが普通である。例1～7、そして、例10と11はそうである。

グループ(b)：「BA」という形を使うのが普通である。例8と9はそれである。

そして、それぞれのグループの特徴は次のように考えられる。

グループ(a)は、Bが述語相当語（愛ความรัก、変化 การเปลี่ยนแปลง、働き การทำงาน、言い方 วิธีพูด、講義 การสอน、工事 การก่อสร้าง）または抽象的なことを言い表す語（悩み ทุกข์、害 โทษ）であり、Aが動作主（田中さん คุณทานากะ、機械 เครื่องจักร、社会สังคม、脳 สมอง、セールスเซลแมน、T先生 อาจารย์ T、M会社 บริษัท M、金持ち คนรวย）、または原因を表す語（タバコ บุหรี่、など）でBの格要素である。このグループの名詞句は、例1のように「BA」という形を使うと「田中さんを愛すること」というような「～を～する」という意味になってしまう。というのは、この場合のBは本来、述語だからである。BとAとの間に khǎwng を用いないと、Aは対象を表し、Bの目的語になってしまうのである。そして、例11のような場合も、抽象的な概念であるBが述語的な素性を持っているし曖昧な存在であるので、khǎwng でAと結び付けないと、BとAの関係も曖昧になってしまう。従って、この場合のタイ語の名詞句は必ず「B khǎwng A」を使わなければならない。

グループ(b)には、Bが述語相当語であり、Aが対象を表す語（英語 ภาษาอังกฤษ、電話 โทรศัพท์）で、Bの格要素である。この場合、Bは本来動詞であったものが名詞化された語であり、AはBという行動または動作の対象、つまり、目的語のような働きを持つ。従って、「B khǎwng A」を使ってはいけない。

以上の両グループとも、実際、タイ人の使い方を調べてみると、文脈により、「B khǎw A」が「BA」になったり、「BA」が「B khǎw A」になったりするようなことはない。

次は所有関係である名詞句について考える。

II : AとBとの意味的關係が所有關係である場合

例 :

- | | | | |
|-----------|------------|---------|----------|
| 12. 彼の子供 | 13. 私の先生 | 14. 私の本 | 15. 会社の車 |
| 16. 人口の一部 | 17. 利益の5% | 18. 猫の髭 | 19. 机の脚 |
| 20. 椰子の実 | 21. M会社の山田 | | |

例21のような日本語の名詞句は、タイ語においては同じような言いまわしが無い。おそらく、タイ人には、個人を属する機関や組織を明らかにすることで、その存在を確認するといった考えが無いからであろう。そのため、このような名詞句を別に扱うべきであり、ここではそれを省きたい。

例12~20に対応するタイ語の表現について、次のように考える。

- | | | |
|-------------|-------------------------------|------------|
| 12. <彼の子供> | [正] ลูกของเขา | 「B khǎw A」 |
| | [正] ลูกเขา | 「BA」 |
| 13. <私の先生> | [正] ครูของฉัน | 「B khǎw A」 |
| | [正] ครูฉัน | 「BA」 |
| 14. <私の本> | [正] หนังสือของฉัน | 「B khǎw A」 |
| | [正] หนังสือฉัน | 「BA」 |
| 15. <会社の車> | [正] รถของบริษัท | 「B khǎw A」 |
| | [正] รถบริษัท | 「BA」 |
| 16. <人口の一部> | [正] ส่วนหนึ่งของประชากร | 「B khǎw A」 |
| | [誤] ส่วนหนึ่งประชากร | 「BA」 |
| 17. <利益の5%> | [正] 5%ของกำไร | 「B khǎw A」 |
| | [誤] 5%กำไร | 「BA」 |
| 18. <猫の髭> | [?] ⁽⁵⁾ หนวดของแมว | 「B khǎw A」 |
| | [正] หนวดแมว | 「BA」 |
| 19. <机の脚> | [?] ขาของโต๊ะ | 「B khǎw A」 |
| | [正] ขาโต๊ะ | 「BA」 |
| 20. <椰子の実> | [?] ลูกของมะพร้าว | 「B khǎw A」 |

〔正〕 ลูกมะพร้าว

「BA」

以上の例12～20のタイ語の名詞句の形を次の3つのグループに分類することが出来る。

グループ(c)：「B khǎwng A」でも「BA」でも可能。例12～15はそれである。

グループ(d)：「B khǎwng A」という形を使うのが普通である。これは例16と17である。

グループ(f)：「BA」という形を使うのが普通であるが、「B khǎwng A」という形を使うことも可能である。例18～20の名詞句はそれである。

そしてそれぞれのグループの特徴は次のように考えられる。

グループ(c)は、BとAは人間関係を表す語（～の子供ลูก、～の先生ครูなど）である。または、Bが所有物（本หนังสือ、車รถなど）であり、Aが所有者（私ฉัน、会社บริษัทなど）である。

グループ(d)は、全体を表す語A（人口ประชากร、利益กำไร）に対し、B（一部分ส่วนหนึ่ง、5%）が数量的、質的部分を表している。

グループ(f)は、全体を表す語A（猫แมว、机โต๊ะ、椰子มะพร้าว）に対し、B（髭หนวด、脚ขา、実ลูก）が具体的部分を表している。

次は、それぞれのグループの名詞句は、実際のタイ人の日常生活でどういうふうに使われているかについて述べたい。

まず、グループ(c)の場合である。実際には、タイ人は「B khǎwng A」と「BA」という形の使い分けをしていないのだろうか。その点を明らかにするため、次のような例文を取り上げたい。

c-1 เด็กที่หล่อนอุ้มคือลูกของเธอ (「B khǎwng A」)

彼女が抱いている子供は彼女の子供である。

c-2 ใคร ๆ ก็รู้ว่าเธอเลี้ยงดูลูกเธออย่างดี (「BA」)

彼女は彼女の子供の面倒をよく見るということを誰でも知っている。

c-3 เธอเป็นโฆษกของรัฐบาล ไม่ใช่โฆษกของงานวัดที่ไหน (「B khǎwng A」)

彼女は政府のスポークスマンであり、どこかの祭りのスポークスマンではない。

c-4 เธอไม่อาจลืม"ภาพ"ของเธอได้เลย (「B khǎwng A」)

彼女は“彼”の姿を忘れることが出来ない。

c-5 เขาสะดุ้งเมื่อได้ยินคำถามที่ไม่ได้คาดคิดว่าจะได้ยินจากปากของรสา (「B khǎwng A」)

彼は、その質問がラサーの口から出るとは思ってもみなかったので、驚いていた。

c-6 ลูกมะพร้าวตกลงมาใส่หัวเขา ถึงขนาดต้องเข้าโรงพยาบาล (「BA」)

椰子の実が彼の頭に落ちた。彼は入院しなければならなかった。

c-7 เขาใช้นิ้วชี้ปาดน้ำตาออกจากแก้มหล่นอย่างอ่อนโยน(「BA」)

彼は人差し指で、彼女の頬から涙を丁寧に拭き取った。

「彼の子供」という名詞句は、c-1の「B khɔɔŋ A」とc-2の「BA」に使い分けられる。c-1の「B khɔɔŋ A」は、つまり、その子供の父親は他の人ではなく、「彼¹」であることを特定し、強調するという意味合があるだろう。それに対し、c-2の「BA」では「彼¹」は「子供²」を説明するために修飾として使われてはいるが、その存在が特定の人を指したり、強調したりすることではない。その名詞句「彼の子供²」の重要さは「子供²」にあるということが考えられる。c-4の「彼¹」とc-5の「ラサー³」もc-1の「彼¹」と同じように、それぞれの存在が強調されていると考えられる。c-6の「彼¹」とc-7の「彼女⁴」も「頭⁵」と「頬⁶」は誰のものであるかを説明するために付けられただけであり、c-2の「彼¹」と同じように考えられる。また、c-3の「B khɔɔŋ A」は、「政府⁷」と「祭り⁸」という言葉が比較対照になっているため、それぞれの言葉にも重要な意味が置かれていると考えられる。

要するに、AがBの所有者として、または、Bとの人間関係を持つものとして特定されたり、強調されたり、またその意味に重きを置こうとする場合であれば、「B khɔɔŋ A」という形が使われる。それに対し、AがBとの所有関係の性格を説明する修飾のような機能を果たすのに過ぎない場合であれば、「BA」という形が使われるということが考えられるだろう。

また、次のような例文もある。

c-8 แก้มสีชมพูอ่อนเรื่อ ๆ ของเธอ แดงจัดขึ้นทันทีอย่างเห็นได้ชัด (「B khɔɔŋ A」)

彼女の薄ピンク色の頬が急にはっきりと真っ赤になった。

c-9 ราサーก็มุดรองเท้าส้นสูงเพรียวของตัวเอง (「B khɔɔŋ A」)

ラサーは、自分の高くて細いヒールの靴を屈んで見た。

c-10 ลมยามดึกหอบเอากลิ่นหอมประหลาดของดอกราตรีโชยมาเข้าจมูก (「B khɔɔŋ A」)

ラートリーの花の妙な香りが深夜の風に吹かれてきた。

c-8～c-10においての名詞句は、Aが特に強調されることでもないし、そこに重要な意味が置かれていることでもないが、全ての文には「B khɔɔŋ A」という形が使用される。それは、この場合の名詞句のBはc-1～c-7においての名詞句のBとは、構造的に違うからだと考えたい。つまり、この場合の名詞句におけるBは名詞ではなく、名詞句である。名詞句であるBは、語数も多く、構造的にも長いため、Aとの関係を khɔɔŋ で結ばないと、所有関係の名詞句とし

では曖昧になることもあるので、khɔŋをつけることにより名詞句であるBと名詞Aがきちんと意味が整理され、名詞節と言ってもよい新たな名詞句を成り立たせると考えられるのではないだろうか。

そして、たとえば、

- c-11 ตำแหน่งหัวหน้าภาค 「BA」
主任の地位／主任という地位
- c-12 ตำแหน่งของหัวหน้าภาค 「B khɔŋ A」
主任の地位
- c-13 ครูมานะ 「BA」
マーナの先生／マーナという先生
- c-14 ครูของมานะ 「B khɔŋ A」
マーナの先生

Aが固有名詞、または、呼称にもなる地位代名詞（主任หัวหน้าภาค, 首相นายกรัฐมนตรีなど）を表す語であれば、「BA」という形にすると、c-11とc-13のように複数の意味が成り立ち、意味するところを取り間違えられる可能性もある。そのため、この場合には、意図的に「B khɔŋ A」という形を使用し、意味するところを特定し、明確にする。

そして、

- c-15 บ้านฉันซื้อทีวีใหม่ 「BA」
私の家は新しいテレビを買った。

この場合は、「B khɔŋ A」という形は使用出来ない。「私の家」において、タイ語で表現される「BA」という形には心理的な意味での家、つまり「家庭」という意味が含まれている。しかし、「บ้านของฉัน B khɔŋ A」という形には「自分と家庭が生活する場所」という物理的な意味での家しか示されていない。そのため、心理的な「家」を表現したい場合には、「B A」という形を使わなければならない。

以上はグループ(c)に属する名詞句を、実際のタイ人の使い分けを参考にしながら説明し、次はグループ(d)について考えてみる。

グループ(d)は、Bの意味が非常に曖昧であるため、Aとの関係がはっきりされない限り、BとAとの所有関係の名詞句が成立しえない。そのため、khɔŋはAとBを結ぶのに重要な役割を

持つようになったので、「B khɔŋ A」という形でなければならない。「BA」という形は普通使わないが、全体を言い表すAを先頭にし、その一部を言い表すBを後に続けて「ประชากรส่วนหนึ่ง」、「กำไร5%」、つまり「AB」という形にすれば使われることもある。この場合、Aは名詞句の範囲、または枠のようなものとしての働きがあり、Bはそれを修飾する機能があると考えられるだろう。

それに対し、グループ(f)の場合は、Bが言い表すことがはっきりとしているので、特別な状況でない限り、Aの存在が強調されたり、特定されたりはしない。そのため、AはBを修飾する機能を持ち、「BA」という形を使うのが普通である。しかし、特別な状況では、たとえば、

f-1 หนดของแมวตัวนั้นยาวจริง ๆ (「B khɔŋ A」)

あの猫の髭は本当に長いですね。

f-2 ในความมืด ตาของแมวนำกลิ้งกว่าตาของหมา (「B khɔŋ A」)

暗いところでは猫の目は犬の目より光って恐い。

f-3 ทำไมขาของโต๊ะตัวนี้ยาวไม่เท่ากันล่ะ (「B khɔŋ A」)

なぜこの机の脚は、長さが違うんですか。

のように、Aの存在が特定されたり、または、強調される場合には、「BA」以外に、「B khɔŋ A」という形が使われることも可能だと考えられる。

<結 び>

対象関係と所有関係によって結び付けられるタイ語の名詞句は、単純に「BA」という形でもよいし、「B khɔŋ A」という形でもよい、というものではない。「BA」または「B khɔŋ A」どちらかの形しか使えない場合もあるし、どちらの使用も可能である場合もある。そして、それぞれの「場合」は、AとBとの意味的關係以外に、AそしてB、それぞれの主素性、機能素性、その文脈、そして、その名詞句の特徴性によって決められる。これは、日本語においてはほとんどの場合、文脈を考えることなく、名詞と名詞を結び付けるのに「の」を使うことができるのとは対照的である。

また、所有関係によって結ばれた名詞句は、対象関係によって結ばれた名詞句と違い、名詞句の成立には文脈に大いに影響されるということが明かである。

<お わ り に>

「B khǎw A」という形が使用される名詞句のすべては、ある意味で、「AのものであるB」、あるいは「Aが起こしたものであるB」と解釈できる。そうすると、ここの「khǎw」は「物」という意味である「khǎw」という名詞から発展してきたのではないかと考えても無理はないだろう。そして、単に、名詞Aと名詞Bを結ぶ文法的な機能しか持たない日本語の格助詞「の」と違い、タイ語の格助詞「khǎw」自体は「～のもの」ということを表すことによって重要な役割を持つ語であると考えられるだろう。これは筆者にとって興味深い問題であるが、現在の段階では、この「khǎw」が、本当に、名詞「khǎw」からきたかどうかはまだはっきりとされていないので、今後の課題に置いておきたい。

〔注〕

- (1) PREP.はPREPOSITION(前置詞)の省略語である。
- (2) Ratchanee Piyamaawadee, unpublished report(1988)。
- (3) 〔正〕は筆者の経験やインフォーマントの意見により、使うのが普通であること。
- (4) 〔誤〕は筆者の経験やインフォーマントの意見により、使わないのが普通である。
- (5) 〔?〕は筆者の経験やインフォーマントの意見により、普通使わないが、場合によっては使うことも可能である。

参考文献

1. 島津明・内藤昭三・野村浩郷(1986)「助詞<の>が結ぶ名詞句の意味関係の解析」、『計量国語学』15〔7〕p.p.247-265。
2. Piyamaawadee, Ratchanee. (1988) Unpublished Report.
3. นววรรณ พันธุเมธา .(1988)“ไวยากรณ์ไทย”, ทั่วทั้งหนังสือตำราไวยากรณ์ไทย.

(1992. 5. 12 受理)